

IV. 小樽商科大学学術研究奨励事業「第7回学生論文賞」

(1) 総評

学生論文賞実施委員会
委員長 中村秀雄

今年度は、学部生部門に46編、大学院生部門に1編と、計47編の応募がありました。昨年度とほぼ同じで、本論文賞が学生に定着してきたことを示しています。所属学科では商学科が21編と最多で、続いて社会情報学科から12編、経済学科から7編、企業法学科からも5編、1年次生から1編の応募がありました。

今年の論題は経営に関する理論の事例研究のようなオーソドックスなものから、異性友人と恋人に関するソフトな話題まで多岐にわたり、審査に当たった教員も頼もしさと楽しさを覚えました。

ヘルメス賞を受賞した「ビジネスシステムにおける経済性の追求－アークスグループの事例から－」は、同グループの八ヶ岳連峰経営の核心に迫ろうとした研究でした。伝統的な「規模の経済」の考え方に加えて、「速度の経済」「範囲の経済」という新しい概念に着目し、これらが本件に当てはまるかを検証、それぞれがどのように同グループで効果を発揮しているかを、各2要素ずつの関係性に光を当てて考察しています。企業経営を目に見える部分と水面下とわけて、水面下に起こっていることに視点を当てた追求心に富む研究です。「大きいことよりも小さいほうが客に近づく」というグループの総帥横山清氏の経営理念に注目しているところも新鮮なアプローチです。脚注もしっかりしており、学部生の論文として高い水準を示しています。大事なことながら忘れられやすいのですが、この論文は言葉がわかりやすいところを特記しておきたいと思います。これからアークスグループが、この経営手法でさらに発展できるのか、はたまたさらなる発展には、他の方法を必要とするのか、に目を向けるのも一興でしょう。

優秀賞には、言葉と現実の関係に光をあてた「外在的考え方の理論的検討と尺度作成の試み」、ガバナンスと人間開発（指数）の関係を探究した「途上国における人間開発とグッド・ガバナンスについて」（あわせてベスト・プレゼンテーション賞）、特定の属性を持つ場所と人間行動の関係をテレビ・ドラマや映画から採取したデータをもとに調べたユニークな「場所性が与える行動の影響について」があります。また同じく優秀賞には、外国の文献を豊富に使って、有事の投資リスクの極小化という現代的な主題を扱う「日経平均VI先物のリスクヘッジ手段としての有効性」がありますが、商大の王道を行く論文でしょう。「経営理念」という固定的な概念が、経営に与える影響があるのかどうかに率直な疑問を持った「経営理念と戦略行動の関係性メカニズム」は、事例研究ですが、理念といった抽象的なものが、時代の中で洗いなおされ、再確認されて経営のバックボーンとなることを実証しています。今後のさらなる研究に待ちたいところです。BOP (Base of the Pyramid)に興味を持った「『市場共創』型 BOP ビジネスの研究」は商大生の社会的関心を示す価値

ある研究です。実社会に出てもこの課題を追いかけて行く積もりだとのことでしたが、その姿勢は称賛に値します。

特別賞は全員一年生のグループによる「異性友人と恋人に関する期待の性差」としました。5年ぶりの特別賞です。多くのデータを集め、先行研究と自分達自身のアンケート結果との違いを発見して、中々意欲的な研究でした。結論と将来の展望に磨きをかければ本賞も狙えたかもしれません。卒業論文レベルのものを新入生が仕上げてくれたことに、委員全員商大の未来を見る思いでした。

第1次審査（プレゼンテーション）には延べ208名の教員が当たりました。26編が第2次審査に進み、34人の教員で提出された論文の審査を行ないました。論文形式、アプローチ、方法論、論理構成、テーマ設定、オリジナリティ、そして何より結論の妥当性などの点から総合的な「質」を評価しました。厳正な審査の結果、「ヘルメス賞」1編、「優秀賞」6編、「奨励賞」8編、「ベスト・プレゼンテーション賞」1編、そして「特別賞」1編が選ばれました。本年度もご多忙中、審査にご協力いただいた教員の方々には、厚く御礼を申し上げますと共に、来年も是非ご協力いただくようお願いいたします。

最後になりましたが、本事業の実施に当たっては、株式会社北洋銀行様より、例年と変わらぬ多大なご支援を頂戴いたしましたので、特記して感謝の意を表します。

（2）結果

学部生の部の受賞者は次のとおりです。大学院生の部は受賞者がありませんでした。

ヘルメス賞

「ビジネスシステムにおける経済性の追求－アークスグループの事例から－」 中村 穂奈美

優秀賞

「外在的考え方の理論的検討と尺度作成の試み」 和田 果樹

「途上国における人間開発とグッド・ガバナンスについて」 古屋 杏奈

「場所性が与える行動への影響について－場面における非日常的コミュニケーションを中心として－」 平田 貫

「『市場共創』型 BOP ビジネスの研究－事例：チョトクールを中心にして－」 桑原 夏美

「経営理念と戦略行動の関係性メカニズム－六花亭製菓の事例から－」 須田 幸野

「日経平均 VI 先物のリスクヘッジ手段としての有効性」 新行内 翔太
河 潤俊
後藤 将典

奨励賞

- 「地域企業における地域資源の経営資源化－六花亭製菓の事例分析－」 笹本 香菜
- 「生活用品の利用ライフサイクルと習慣性に関する考察」 古川 瑞枝
- 「How Communicative English teaching could be introduced into every high school in Japan?」 平田 祐基
石川ジョアンナ
星川 里絵
- 「鉄道車窓景観から見た都市境界の分析」 梶野 樹
- 「退職給付会計基準が人々の生活に影響を与える可能性－退職給付制度と会計基準の関係－」 小武 真鈴
- 「エージェントの応答時間がユーザーのエージェントに対する印象と信頼度に与える影響」 村田 誠将
- 「重工業界におけるマーケティング－IHI のケース分析－」 工藤 和果
- 「『睡眠の質』を考える－高校・大学・社会人の『睡眠』と『生活リズム』の横断調査に基づく分析と考察－」 坪山 真樹

ベスト・プレゼンテーション賞

- 「途上国における人間開発とグッド・ガバナンスについて」 古屋 杏奈

特別賞

- 「異性友人と恋人に対する期待の性差」 小林 世羅
山室 奈々
久末 悠稀

副賞

ヘルメス賞 10万円	優秀賞 5万円	奨励賞 1万円
ベスト・プレゼン賞 1万円	特別賞 1万円	

(3) 優秀賞以上論文の講評

ヘルメス賞

「ビジネスシステムにおける経済性の追求－アークスグループの事例から－」

中村 穂奈美

本論文は、ビジネスシステムという観点から、アークスグループの「八ヶ岳連峰経営」と呼ばれる経営手法の事例を検討したものである。本論文ではまず、ビジネスシステムについて、先行研究を整理することで、関連する諸概念を明らかにしている。その上で、アークスグループの展開について広範に資料を収集し、アークスグループがどのような背景から拡大を行っていき、また、その過程で、本論文での焦点である「八ヶ岳連峰経営」が具体的にどのように適用されているのかを詳細に記述し、これらを踏まえた上で、アークスグループのビジネスシステムの特徴を考察している。

本論文は、近年の景気低迷下でM&Aを駆使して急成長を続けるアークスグループについて、その経営手法に着目し、ビジネスシステムという観点から詳細に事例を検討することによって、競争優位に寄与するような小売業における事業会社の統合の仕組みを明らかにした点で非常に意義がある。他企業のビジネスシステムのレビューが不足している感はあるが、本論文は、卒業論文として十分に優秀なものと評価できる。

優秀賞

「外在的考え方の理論的検討と尺度作成の試み」 和田 果樹

本論文は、「外在的考え方」という、一般意味論の一つの基本概念に準拠しながら、我々の認知・行動のあるべき姿を探ろうとした研究の成果である。まず、一般意味論の理論的な枠組みを踏まえて「外在的考え方」なるものの特徴を浮き彫りにし、さらに、そうした理論的研究の延長線上で実証的な研究をも試みている。すなわち、この考え方がどの程度、現実に実践されているかを測るための尺度を、学生へのアンケート調査をもとに導き出そうとしている。

本論文の目的は、平たく言えば、客観的で事実によくした見方や態度とはいかなるものかの実態を示すことにあるが、このようなテーマは学術的に興味深いばかりでなく、学生生活を締め括るものとしてもふさわしい。論文の出来も、卒業論文として高く評価できる水準に達している。ただ、一つ残念なのは、「外在的」ということにこだわるあまり見方がやや狭隘になっている、と思える点がなくはないことである。例えば「言葉」や「記号」には、論文の中で言及されているような役割のほかにも、重要な役割があるのではなかろうか。

優秀賞

「途上国における人間開発とグッド・ガバナンスについて」 古屋 杏奈

本論文は、途上国における人間開発（寿命、知識、所得）を推進するためには被援助国政府によるグッド・ガバナンス（政府の有効性、制度の質、法の支配など）が重要かどうか、という問題について分析している。この問題は、今日、世界銀行などの国際援助機関において、途上国の経済発展を実現する上で非常に重要なテーマとなっている。本論文では、先行研究を踏まえた上で、二つの新しいアプローチを採用している。第1に、開発水準を測る方法として一般的に使われている一人当たり GDP の代わりに、より普遍的な寿命・知識・所得に基づく人間開発指数（HDI）を採用している。第2に国際クロス・セクション分析に加えて異時点間分析を採用している。これらの新しいアプローチを用いて、人間開発とガバナンスには正の相関関係があり、過去30年間で人間開発の進んだ国と進まなかった国の差が生じた要因の一つとして、ガバナンス状態に差があることを統計分析によって明らかにしている。

本論文は、問題設定、先行研究、そして創造的なアプローチと新しい結論というように、論理構成が論文として理想的な形になっている。単なるレポートの閾を超えない卒論が多い中、本論文は数少ない論文らしい論文であるという点において高く評価できる。

優秀賞

「場所性が与える行動への影響について—場面における非日常的コミュニケーションを中心として—」 平田 貫

本論文は身近に存在する「場所」について定量的な分析を行うことで、「場所」の持つ意義や役割を検証することを課題としている。新聞やテレビなどのマスメディアを通して流行のスポットが報じられるように、その時々に応じて「場所」の持つ意義や役割は変化している。しかしながら、「場所」の意義や役割、その変化を感じながらも「場所」について説くことは難しく、多くは主観的な感覚によって説明される。

本論文の優れている点はこのように個々のケーススタディになりがちな「場所」について、全国的に認知されて一定の評価を得ている映画やドラマを観測対象とすることで客観的に「場所」の意義や役割を説明しようとしている点である。映画やドラマで映る公園や海、道路についてそのシチュエーションごとの分類を行い検証できるデータ群を構築し、これを因子分析による定量的な分析をすることで「場所」に対する自身の考えを説明している。この論理的な過程は卒業論文として優れており、高い評価に値する。

優秀賞

「『市場共創』型 BOP ビジネスの研究—事例：チョトクールを中心にして—」 桑原 夏美

本論文は、所得の低い貧困層に対して展開される BOP (Base of the Pyramid) ビジネスの分析から、冷蔵装置であるチョトクルの事例を通して企業が所得の低い消費者とともにその新たな市場を共創していくプロセスを調査、研究したものである。特にソーシャルビジネスの必要性が高まっている昨今において、当該ビジネスモデルが貧困削減に大きく寄与していることを証明し、BOP ビジネスのあるべき姿を訴える筆者の意思は評価に値する。また狭義の BOP ビジネスの定義、目的を独自に設定し継続的な企業活動、長期的な経済発展という重要な要素を組み込んだ BOP ビジネスの説明は独創性の高い内容である。

一方で未だ BOP ビジネスという形態が確立されておらず、今後の発展を考えた時に「市場共創」型 BOP ビジネスの問題点を整理し、新しい視点でビジネス環境の改善提案ができれば研究論文としてさらに深みを持たせることができたのではないだろうか。筆者による社会での実践を大いに期待したい。

優秀賞

「経営理念と戦略行動の関係性メカニズム－六花亭製菓の事例から－」 須田 幸野

本論文は、六花亭製菓を事例研究の対象としながら、経営理念と戦略行動との間にどのような関連性のメカニズムが働いているかを明らかにしようとしたものである。先行研究のレビューから事例研究、考察、結論と標準的な論文の構成に則り、先行研究のレビューから説得的な知見を導出している。また、経営理念と戦略行動との関連性における理論的背景を明確にし、著者自ら小田社長のインタビューや工場見学を行うなど、独自の情報収集を行っている点は高く評価される。

一方、六花亭を事例分析の対象とすることの論拠がやや不十分であり、同社の歴史を記述した箇所が経営理念と直接的にどのように関連するのかが明確でないこと、さらに経営理念の拡大解釈と経営理念に縛られない戦略行動との間の境界が曖昧であるといった問題点を有する。しかしながら、論文全体を通して、非常に論理的な展開がなされており、学部学生の論文としての質は非常に高い。

優秀賞

「日経平均 VI 先物のリスクヘッジ手段としての有効性」

新行内 翔太／河 潤俊／後藤 将典

証券投資における新たなリスクヘッジ手法、あるいは、リスク分散手法を開発しようという意欲あふれる論文である。分析結果からは、本論文が着目した日経平均 VI 先物がリスクヘッジとして有効なものであることが示されており、実務性も高い。ただ、先行研究のレビュー、および研究対象期間の設定方法には改善の余地があると考えられる。また、ある意味業界では半ば常識的な概念を仮説においているため、研究の意義については深堀してアピールする必要がある。しかし、どの程度本分析手法が有効かを実データをもとに具体的に数値化したことは大いに評価に値し、今後の発展性が大きい研究であると考えられ

る。

特別賞

「異性友人と恋人に対する期待の性差」 小林 世羅／山室 奈々／久末 悠稀

論文執筆は決して楽な作業ではない。一つの論文の完成には、入念な研究計画の立案、調査・研究材料の作成、集計や分析作業、先行研究に関連させた考察と結論づけなど、多くのステップをクリアする必要がある。学生が論文執筆のプロセスを体験する機会は、ほとんどの場合、卒業論文のみに限られる。

本論文は、対人関係における好意や期待に注目し、男女間と年代間における比較を行ったものである。部分的に研究内容や考察に改善の余地が見受けられるが、文献調査に基づく仮説構築、社会調査パラダイムに基づいた調査の実施、筋道だった考察と結論づけなど、論文に必要な要素を全て備えている。

本論文が特別賞にふさわしい理由は以下の 2 点である。第一に、応募者らは一年生であり、論文執筆経験がなかったことである。その状況において、受講科目における学習内容を発展させ、研究成果として仕上げている。第二に、研究活動に対する姿勢である。応募者らは、自らの知的探求心に基づき、研究成果を論文として完成させ公開している。この研究意欲は、あらゆる学生の参考となるものである。

学生論文賞は、学生の意欲的研究を大いに歓迎している。応募者らは、研究活動に際して学年は問題にならないことを示した点において特別賞にふさわしい。今後のさらなる活躍が期待される。

(4) 審査員一覧

1次審査員一覧 (50音順)

穴沢 眞	石黒 匡人	石崎 香理	大津 晶	加賀田 和弘
片桐 由喜	加藤 敬太	神崎 稔章	國武 英生	小島 陽介
小林 友彦	齊藤 一朗	佐藤 剛	澤田 芳郎	高野 寿子
辻 義人	渡久地 朝央	中川 喜直	中村 秀雄	西本 章宏
沼澤 政信	南 健悟	宮崎 義久	山田 久就	山本 堅一
和田 良介				

2次審査員一覧 (50音順)

猪口 純路	江頭 進	大津 晶	小笠原 春彦	岡部 善平
小田 福男	乙政 佐吉	加藤 敬太	北川 泰治郎	木村 泰知
久保田 顕二	近藤 公彦	堺 昌彦	坂柳 明	佐山 公一
渋谷 浩	杉山 成	高宮城 朝則	高井 収	玉井 健一
辻 義人	出川 淳	渡久地 朝央	中川 喜直	西本 章宏
沼澤 政信	篠本 智之	花輪 啓一	深田 秀実	二村 雅子
保田 隆明	宮崎 義久	芳澤 聡	劉 慶豊	



表彰式 学長を囲んで (2013年3月15日)